振る舞いから設計する——梓設計女子トイレコンペ

簾藤麻木 Maki Sutou
高畦明子 Akiko Takaaze

設計の経緯

2009年夏、梓設計では女性社員の増加から女子トイレを新設することとなり、社内コンペを行った。若手女性社員が設計案を提出し、ベテラン女性社員が審査する。まさに女性による女性のためのトイレコンペである。勝ち抜いた当案は、女性らしさの象徴ともいえる“くびれ”をテーマに、人間行動学から提案を行い、2010年4月に竣工した。

–

振る舞いから考える

従来オフィスの設計で対象とするのは、性別も年齢もない、“人間”という行動モデルである。しかし、ここに女性という性差の視点を加えることで面白い特徴が見えてきた。

というのも、男性のトイレでの行動は、用を足す→手洗いの一方向であるが、女性は用を足した後、化粧を直したり、歯を磨いたりと、実は行動の往来が起こっている。複数の行動が洗面エリア周辺で発生することで混雑が生じ、いわゆる「女性のトイレは長い」現象が生まれている。しかし、さらに行動を観察していくと、実は化粧直しに必要なのは鏡だけであったり、歯磨きでは、うがい以外は鏡も洗面・手洗用ボウルも利用していない状況が見えてきた。つまり、混雑の原因である“見えない使用中”を解決することが女性用オフィストイレのひとつの解になると考えた。

–

“にげ”をデザインする

そこであえて便器を1つとし、3つのボウルを分散配置する計画とした。ボウルは、簡易な手洗用や歯磨き用など、用途別に大きさを変え、周辺には、女性が寄りかかったり、腰かけたりできるよう、混雑緩和のための“にげ”のスペースを設けた。こうすることで、今必要とする人以外がボウルを専有することがなくなり、機能的で快適な空間の実現が可能となった。一見、効率から考えると無駄に思える計画が、かえって機能・効率を高めながら、女性独自のトイレコミュニケーションの活性化にも寄与している。

–

女性モデュロール

各寸法は、Le Corbusierのmodulorを現代の日本人女性の体型に当てはめ、計画のベースとしている。ベンチや寄りかかりのくぼみの細かい寸法は、自然な仕草や体勢を支える形、心地良い距離を一つひとつ実験して確認した。例えば、鏡までの距離はマスカラからリップまですべての化粧を行って奥行きを決めている。

–

使いやすさと心地良さ

便器は「SATIS」を採用。コンパクトで高機能、今回の限られた空間にピッタリであった。また壁、天井、カウンターは、「INAXライブミュージアム 土・どろんこ館」もつくられた左官職人・久住有生氏にすべて左官で仕上げていただいた。その技は息をのむばかりで、土佐漆喰で仕上げられた照明孔は、丁寧に内側まで螺旋状に塗られている。漆喰のしっとりと落ち着いた雰囲気に調和するよう、中央には一品生産品の陶器製のボウルを配置し、職人さんの手の温もりが伝わってくる素材や仕上げを選択した。設計手法と同様に、既存オフィスと対比を図った。

–

効率から行動へ。今回のトイレがひとつの新しい提案になればと考える。

–

なお、今回のトイレによる社員の行動の変化について、早稲田大学の学生と共同研究を開始した。心地良さを科学的に解明できたらと期待している。

1

2

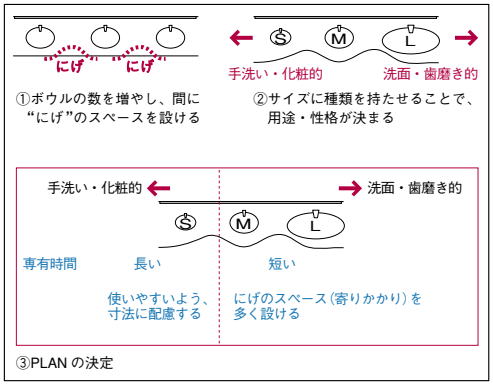
3

4

5

6

1——入り口から見る。ボウルには“にげ”のスペースを考慮し、分散して配置｜**2**——女子トイレブース内｜**3**——左官仕上げのカウンターとボウル(L)｜**4**——土佐漆喰で仕上げられた照明孔兼換気孔｜**5**——左官仕上げの手洗用ボウル(S)｜**6**——入り口方向を見る。右の壁には寄りかかるくぼみ、左にはベンチ｜**7**——ダイアグラム



7

すとう・まき——梓設計設計室／2008年、早稲田大学大学院修了。同年、梓設計入社。
たかあぜ・あきこ——梓設計設計室機械システム部／2009年、広島大学大学院修了。同年、梓設計入社。